

関東近海に来遊するマサバの生態

誌名	水産海洋研究会報
ISSN	03889149
巻/号	17
掲載ページ	p. 129-130
発行年月	1970年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波事務所
Tsukuba Office, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat



- 8) 東海区水研：蒼鷹丸調査資料，1967～1969，未発表。
- 9) 平野敏行・藤森完・上原進・杉浦健三・藤本実・小原久美子：漁業資源研究議報，5，
8-14（1966）。
- 10) 五十嵐正治・沢田易治：静岡水試研報，2，1-18（1969）。

5. 1都3県水試による協同調査の現状

花 戸 忠 夫（千葉県水産試験場）

関東近海に來遊するマサバについて、関係1都3県水試では従来より独自の立場で調査研究を進め、それぞれかなりの成果が得られて来ているが、近年にいたり北部海域での漁獲の増加、ソ連船の入漁等、この資源に対する関心が非常に高まってきた。そこで1都3県水試では44年漁期よりさらに研究の充実をはかり、業界に寄与する目的をもつて組織的な調査を行つてきている。

すなわち、各試験船による漁期前、漁期中一斉調査、環境、生物調査等をそれぞれ分担して行ふこと、また陸上における生態調査でもさらに充実した研究を進めるとともに、研究業績についても総合的な討議を経て統一された報告を出すこととした。

これ等の結果、44年漁期については44年11月統一報告書として業界に発表された。

さらに、45年漁期についても1月7日より関東近海全域の漁期前調査を一斉に行い1月13日勝浦市に参集して調査結果の検討、初漁期の予測が発表されている。

このように今後一層関係水試は協力体制を緊密にして成果の向上をはかり、業界に寄与したい。

6. 関東近海に來遊するマサバの生態

鈴 木 弘 毅（神奈川県水産試験場）

関東近海に來遊するマサバについての生態は、東水研をはじめ1都3県水試、関係団体等により徐々に明らかになりつつあり、その成果は漁況速報、漁況予報に反映されている。

現在、直面している問題として、主に下記の3点があげられる。

- (1) 性成熟進行の不規則。
- (2) 南下主群と北上残留群との関係。
- (3) 漁場間の魚群の関係。

この解明のためには、従来から行なわれている分布、成熟度の変化による方法のみでなく、多くの角度から究明する必要がある。

そこで、化学的手法（肝蔵粗脂肪量測定）を用い、現在調査中である。ただ今回報告する結果は、

標本数が少ないため明らかな結果は得られていないので今後さらに継続し問題の解明につとめる。

調査方法

魚体から肝臓を抽出し、大島式水分定量器を用い、次式により粗脂肪量を算出した。

粗脂肪量 = 生重量(肝臓) - (水分量 + 乾燥重量)

結果

先にも述べたように標本数が少く、大きな成果はあがっていないが、関東近海に來遊するマサバ群についての粗脂肪量変化の概略がつかめた。

すなわち、1~4月期は産卵期に近づくにしたがい粗脂肪量は低下しており、生殖線の熟度との対応関係がみられる。また、相模湾内に夏期に生息するサバ群の粗脂肪量の変化がつかめた。

7. 総合討論

座長 石野 誠(東京水産大学)

宇田(東海大):総合討論に加えて、漁業者の立場から「直接漁業を通じての考え方」等も発言してほしい。

厚海(東日本サバ釣生調組合長):1魚種での年間の漁獲量には或る一定の限界があると言われている。近年ではサンマにその例がみられるが、マサバについてもこのような例が出るのではないか。

また、資源の減少と併行して魚体も小型化すると言われる。昨年の道東、三陸沖での小型魚の多獲と今季の犬吠沖のサバも同様小型魚の出現が多いことから、これが資源の減少を裏付けないか。

宇佐美(東水研):研究者の中で60万トン限界説は古くから言われているが資源研究面では、この点はまだはつきりしていない。

最大持続生産量の限界のメドを立てることは資源研究の中で重要事項であるが、この面での研究は未だ解明されているとは言えず、資源量評価は行われていない、現在のところサバの生活の解明を主な目的として取り上げている。

たと過去の研究からみると、漁獲量はその資源の10%前後がもつとも資源面からみて好ましい状態と言われている。マサバ太平洋系群について簡単な計算によると概略10~30%と推定できることから、一概に漁獲量のみで資源の減少を言々することはできない。しかし、他の産卵量の推移、体長組成の変化等からみると楽観はゆるせない状態と言えるようであるが、今後急激な資源の減少は今のところ考えられない。

宇田:ニシン、マイワシ、クロマグロ等では資源が漸増し、高水準を維持したのちに減少傾向に入るとその速度はかなり早い例がある。サバについても、このような傾向が出る可能性が考えられるので、我々は注意深く観察する必要がある。

また、資源の減少時に努力量が増加するとその減少傾向は相乗的に早まるので、その際は努力量を減らす対策を講じ、少しでも資源維持をはかるべきである。